

くさせてゐたことは、

「御前の爲を思つて下さる人達を、有難いと思へよ。殊に御前を手で育てた人達をな。」といふ詞を僕に浴せ掛けた。

僕は、

「ジョー、さやうなら。」と言ふと、ジョーは、

「あゝ、機嫌よく行つて來な。ビツプや」と言つて呉れた。

僕はジョーに別れた事がないので、始めのうち

つとむさん

ある年のことであつた。近所の豆屋の主が突然幼稚園に來られて、四五日前五才で入園したつとむさんが幼稚園からの歸り路で、豆をつかんで逃げて困るから。以後御注意下さいと云つてかへられた。つとむさんは、可愛想な子であつた。ある

は、目に入つた石鹼の泡の爲と、切な情との爲に馬車の中から、外を見ても星さへ目に入らなかつた。併しやがて星は一つく煌めき出したもの。僕は、ハビシヤムさんの處で何だつて遊びに行くのだから、また何をして遊べといふのだが皆無分らなかつた。

（ビツプの話も此先はまだくあるのですがあまり一つ事が續きますから、ザッケンスは暫く御休みにして他の作者のものに移りませう）

狸園

うどん屋のひとり子だが實子ではない。下女の某が職人と通じて出來た私生兒ではあるが、主人が子のないのを幸ひに長男として育ててくれたのはよかつたが、幸か不幸か其後女の實子が出來た。つとむさんはあまりものになつてしまつて、養父母

の愛は妹に奪はるゝ様になつた。實母はつとむさんから下女として取扱はれて居るが、養父母が我子に對する仕方の心足らず不快の心に耐へかぬる時は、いつもつとむさんを打擲して養父母へあてこすりをした。つとむさんは養父母にはいつも冷たい扱ひをうけ、下女だと思ふ實母よりひどい體罰をうける、どんなにつらかつたであらう。其の上店の若いもの共よりよからぬ行を見習らつて日に日に心が荒んで來た。妹をひどくしたり店の人達をも困らす事もある。其度に養父母の愛は冷え實母は尙々打ち腹立ちてひどくこらしめる。つとむさんは養父母も下女も店のものも近所の人も皆我が敵であるとの自覺は次第に高じて、大人に對する反抗心は極度に達した。されば入園後も友は己が玩具として愉快を覺ゆるもの、先生達は我を呪ふ鬼であるとの考へで居つたらしい。先生は此子供がかゝる事情の許で育てられた事は知つて居

たが性質がかく根底から荒んで居る事を知らなかつた。豆屋さんから話のあつた翌日つとむさんを一室に呼んだ。「つとむさん、あなたなせ、おかへりに豆屋さんで、いたづらをしましたの」「あのねあの……そんな事はしません」「だつて豆屋のおじさんが、いらしつてお話でしたよ」「あの……ね、何にもしませんよ」「よい子だから、かくさないで仰しやいよ、物をかくしたり、うそを云ふのは、よくない事なんですよ」「……」「かくさないで、皆云ふておしまひになる様な子はりこうもの。なんだかね。あなたのすきな千代ちゃんはね、いつでもかくさず何んでも云ふ子ですよ」「……」。先生少々閉口の氣味であつたが氣をかへて。「つとむさんの御手々の大きな事こんなに。つよそうだから大きくなるとよい兵隊さんになれますよ」「僕大きくなつたら大將になるの」「あゝなれますよ。この位つよいとね、だがね大將になるのには、物をかくしちや、だめですよ。つとむさんは、かくさな

かつたら大將になれるんだがね」……「きのふね
まめやさんの御店の前を通りましたか」ただうな
づくのみ「豆をつかんで、まいたでせう」又うな
づいた「そんな事はよくない事ですの、よくない事
をすると大將にも何にもなれませんか。これか
らよしませうね」と云つた時つとむさんは、じつ
と顔を見てうなづいた。普通のいたづらものは、
これで一段落だから先生は其つもりで放してやつ
た。

一時間程経て他の先生から。抗議を申しこまれ
た。其の話によると、一團の幼児が幼稚園事をして
楽しく遊んで居る所へつとむさんが来て、「僕先生
になるから御ならび」と命じた。常から恐ろしく思
つて居るつとむさんだから云ふがまにまに圓陣を
造つた。つとむさんは中央に立つて、じつと見て
居たが、つと走り寄るかと思つると、電光石火の勢
で端から手を舉げて打つた廻つた。あまりの不意
打ちに衆兒はただ目を見張り呆れるばかりであつ

たが、五六番目に居つた女兒が聲を舉げて泣きた
した。これに氣を得て二三兒一時に聲を擧げた。

「先生つとむさんが」と云つた時は早や走り去つて
陰もなく、泣く子の聲のみ聞えた。先生は先刻か
ら見て居つたが、これもあまりの早業に手を出す、
すきもなかつたのである。泣く子をなだめた後事
件のなり行きをつとむさんの受持に話した。其日
子供をかへした後の職員會で、つとむさんの普通
の子でない事、如何に處置すべきか、如何に保育
すべきかについて種々打合せもし議論も出たが遂
に其原因を種々の方面から手分けして調べると云
ふ事になつて種々苦心の結果前記の事情をたしか
めた。さては。つとむさんは愛情なるものを知ら
ぬ子だ。暖かみを覚えぬ。水の様な周圍で育つた
子だと知れて見ると保母の全員は彼れに對する愛
は湧きたたず居られなかつた。かくて園内に遊
ぶ内は同情ある先生の手に取扱はれ居るから師に
對する反抗心は次第に落ち付いて來た様に見える

が園を一步ふみだすと、「小林君一寸まで」そら出て来た。小林君逃げだした。「おい。まてと云つたら」と追ふ。小林君逃れぬ所と観念し「なあに」とふりかへる。「其れを見せたまへ」と云ふなり小林君が苦心して作りあげた今日の製作品を見る間に壊してしまつた。衆兒はただ恐ろしげに見て居るのみ。小林君も負け嫌ひの子供だから、半泣きになりながら手を舉げて打つてかかつたが到底つとむさんの敵ではなかつた。路行く人に助けられ園に送りかへされた。かゝる事は大い毎日程あつた。二ヶ月経た頃横町の古着屋のおちさんが先生に御目にかゝりたいと云つて來られた。何用かと伺ふと又つとむさんの事件だ。先日から度々店の賣品にいたづらをする釣りぎれを引落す事もあれば衣類の間にもぐり込む事もある昨日などは美しい帯に泥をぬりつけた。丁度店の者が居たから「コラ〜」と追ひ行くと頑情な態度を示し肩を聳し腕を張り横目でにらんで「なんじやい、こらなんじ

やい」と逆襲をする末恐ろしの子供ですから一寸御注意をとてかへられた。唯一の同情者たる先生達はつとむさんの事件のある毎にいいいよ哀れの念増して、或はすかし或は叱りなだする事もあれば賞詞賞品で奨励する事もあり全員手を盡し心ありだけ配つて居つたがこの古着屋さん事件を聞いて、うんざりしてしまつた。中にも受持などの落膽と云つたら、例へるにものがない。自分の腕が足りないからであらうか、まだ愛し様足りないないのであらうか、取扱ひに間違の點があるのかと終には聲を舉げて泣くのである。けれども打ち捨て置く事でないから保護者を召喚したが家が多忙だとか云つてどうしても出て來ない。家庭訪問をしては店の者共にあまり、つとむさんの悪行をきかせたくないとか云ふ慈悲心から、ひかへた。しかたがないから實母なる下女をよびだした。園長から同情ある言で、つとむさんの過去將來につき聞きもし話しました。實母はいかにも恥ぢたる様

にて己がふしだら及其後の経過を語り現在のつとむさんの有様を話しては泣き聞いては後悔にたへぬ様であつた。遂に一時家庭を放してはと相談したが經濟上さる事も出來ず御迷惑なれば退園をさしてはといふ氣毒げに云つたが、この哀れなるつとむさんが溫き園を離れ冷き家庭のみにあるとすれば、どんなものになるであらうと思ふと、どうも離す氣になれず、遂に終日園に預り規律ある生活をして朝は實母より受取り夕は受持保母家庭へ送り届け途中の惡戯の機會のない様にしたならばと約束して翌日より實行した。所が又他の方面に向つた。それは一職員の妹を園の幼兒として預つて、居つたが常に姉と共にかへる事になつて居たからつとむさんが終日保母の傍に何かして遊んで居る内つひ手を取つて親しむ様になつた。双方ともいつも保母の用事の手傳とか畑の掃除とか勞働をして御菓子を貰ひ楽しく遊んで居た。が或日の事共に植物の枯葉取りをさして居た所へ來客が

あつて保母は傍をはなれた。すると俄かに女兒の泣き聲がするので驚いて行つて見るとこれはいかに、つとむさんは野獸の様な勢でけしかる振舞をして居る。翌日より早速女兒を斷り園第一の善良男兒を友に頼んで嚴しく監督した。そしてかゝる幼兒は當然かゝる行爲の出来る事を豫想して注意しなかつたを悔いて以後殊更に全力をつくして豫防した。其爲めか、かゝる行爲はこれ限り見る事がなかつた。かくて其後二ヶ年間一日の如く力のあらん限り保護もし誘導もし或は保母も共に泣き或時は手を取つて喜び又或時はをどしもし。すかしもした。その日記の一節を引き抜けば

九月十五日

一、朝の時間に於て自由に放したる際は彼はぼたんがけの紐にて他幼兒の顔面を叩き廻りたり（後他兒に彼の行爲を尋問すれども彼を恐れし爲なるか一言も發せず。）

一、外遊より入る際木馬及車の置き場所を正しく

なしたり。

一、室内より出づる際出入の戸せまく開かざりしを彼は卒先し開きたり。手洗の際他幼児を押し泣かしめたり。其言ひ譯けは（後より他兒押したるにより僕も押したり。）

一、幼児退出後には一人おとなしく砂場にて遊び居たり。

一、園の出入りの商人に本の繪を質問し正しき答へを得たるに其れは間違ひ居れりと彼を責めたり。

一、園長より左右の手により善惡を調べられしに善行を増してもあまり喜ばず。惡行を増しても悔いず。平然たる有様なり。

一、返答を求むる事あるも直に答へず。

九月十六日

一、砂場に落ち居たるはかりを拾ひ來れり（依りて各室に付尋ねしめたり）。

一、禁止は容易に守らず。

一、副食品にはかまぼこ、油揚。

一、午前十一時よりは砂場に於て靜かに遊び手拭を拾ひ來れり。

一、同一の遊嬉は長時間續づく事まれなり。

一、食事を終へて後は繪畫手本を暫時見たる後畫き方をなせり。

一、室内に於ては自分のよく知り居る事にても直ちに保姆に尋ぬる事を常とす。

九月十七日

一、机のまがりを正したり。

一、汽車電車等を作り他兒と仲よく遊び居たり。

一、室内に於て遠き幼兒の許へ行き繪本の交換を望み泣かしめたり。

一、相撲を取らしめたるに意外の取組に満足し力限りの勇を出し相手を負かし意氣旺盛なりき。

一、食事に際し昨日と同一の副食品なりし爲なるかかまぼこの皮を取りこれを嫌ひ飯に稍々色つき居たるを見てほこりなりと稱し食す事を拒み

たり、再三云ひ聞かせたる結果食したり。(うど
んやなるためいつも、かまぼこと、油揚なり)。
一、午後は書き方をなし一時間餘靜に遊び其書き
たる畫に年月日及び其の名を書きたるに非常に
興味深く再之畫き其の名を保姆に書き貰ひた
り。

一、次に、おやつに、おはぎ、三個與へしに非常
に喜び二個半を完全に食し半個を遊び居たり
其所感に曰く「おはぎははじめてでおいしい」。

一、餘時は、ぶらんこに乗り又は幼年畫報を見其
説明を望みたり。

一、保姆の手をふみ、「いたい」と云へば、「ばち
だ」と答ふる事再三なりき。

十月二十三日

一、早朝より本日の辨當器の新らしきを多くの兒
童に吹聴し喜び居たり。

一、談話の際他人の所持品に誤りて壞したる時は
如何に所置するかの間に對し戶外にて拾ひたる

金子にて同一品を求め返へすと云ふ。保姆はそ
れは盗人と同様なることなり」と話せしに兒は
又手品にて出し返すと云へり。

一、べんとう器の新らしきを喜び食後前掛にて
拭ひ居たり。

一、歸りの際他兒の忘れたる辨當を持ち來り保姆
に渡したり。

一、板畫して遊び居たり。

十月二十四日

一、朝の間は男女兒、合して兵隊事を室内に於て
演せしが室外に於てなせと云ひたるに「皆が笑
ふからいやです」と答へたり。

一、其れより外に出て二三兒と軋轢を生じ喧嘩を
二三度起したり。

一、次に板を使用し女兒と共に仲よく落し山等
演じ遊び居たり。

一、其間に年長兒入り來り又もや軋轢を生じ板の
取合ひを始めしかば仲裁して彼れに取らしめ彼

れをして満足に一日を遊ばしめたり。

一、副食物には、かまぼこ、漬物。

一、前日に於ける活動寫眞の談話を語らしめたり

「即ち敷島俱樂部へ行きました」。「如何な寫眞を見ましたか」と云ひしに、「女の人が河へ落ちる男の人が助けたところを見ました」と云へり。

グロースの遊戯論

倉 橋 生

以下の日誌は略す

漸く學齡に達し其の年四月小學校へ送る時は根本的に人格を變へたとは云へぬが不良分子だけは充分取り除いたと自信した。

小學校の訓導に入園以來の有様及取りし方法を充分話し將來を、くれぐれも頼んで置いた。(終)

グロースの遊戯論は、皆さんは兒童心理の書物を御覽になりますと大抵の書物には皆参照して

居ります有名な書物であります。遊戯の事に關しましては、別段改めて申上げるまでもない、御分りになつて居る事のみであらうと思ひますが、普通の書物には、グロースの事を餘り詳しく論じて居りませぬ。即ち遊戯の根本的研究の一つとし

て、之れを出来るだけ忠實に紹介して見たいと思ふのであります。

グロースは元來美學者でありまして、初めて著述せられました時に、美學入門と題する書物を書きました。それから以來、美學と遊戯と關係あると云ふ所からして、此書物の著述に着手せられたのであります。一番初めに出了したのは、「動物の遊